

ひろしま
歴史回廊
第9部・再考 敵島台戦 ⑧

小豆川降参に追撃された陶晴賢は、大江山まで逃れて切腹した。晴賢に最後まで付き従ったのは五、六人だったと「房頭書」は伝えている。

■絶壁で9日間抵抗

しかし、合戦はこれで終わりではなかった。弘中隆兼とその子源太郎は、二、三百人の兵とともに「龍ノ岩」(駒ヶ林)に登って抵抗した。標高五百九尺、麓からも険しい山容を仰ぎ見ることが出来る。今春、学生たちが現地に登ったが、断崖絶壁、まさに「龍ノ岩」と呼ばれるにふさわしい。毛利軍に包囲された隆兼父子は、ここに三日間たてこもった後、切腹した。隆兼が合戦直前に岩国の妻や一族にあてた書状は、隆兼の「遺書」となった。娘梅女の将来を案じつつ、妻に対しても「陣中の祈禱だから、こ

陶・弘中の最期 敗者の視点で見直し

のよつな書状に驚かないでほしい」と気遣う内容は、戦国武将の細やかな人間性を示す。同時に、これまで勝者Ⅱ手利の視点しか合戦を見てこなかった私たちに、敗者の視点から合戦を見直すきっかけを与えてくれた。

元就が馬之坂の綱杖に焦慮を募らせている九月二十八日、なぜ隆兼は討ち死にを覚悟したのか、私自身明確に説明できない。卒論で隆兼を研究する岩田出身のYさんが、これからのような答えを見つけてくれるのか楽しみにした。

■恐れられた戦友の存在

さて、隆兼の娘梅女は、後に大友氏の家臣となった西郷家に嫁いだらしい。隆兼関係文書は西郷家文書として今日に伝えられている。隆兼書状のあて名に見える清水寺尊愨は、永禄十二(一五六九年)豊後から渡海して山口に侵入した大内輝弘軍に、一族の弘中弾正忠とともに参加した。

若き日の隆兼と元就は、芸・備後の国衆を指揮して尼子方と戦った「戦友」だ。敵島合戦前、元就が恐れていたのは、自分の手の内を知り尽くしている隆兼の存在だったと思われる。そして、晩年の元就の心胆を奪からしめた大内輝弘の山口侵入の軍勢に、弘中隆兼の関係者が加わっていたことを、元就は知っていたのだろうか。

秋山伸隆・興立広島大教授



弘中隆兼らが登って抵抗した駒ヶ林の断崖絶壁



「再考 敵島台戦」は今回で終わります。次回から第10部「敵島の文化」を掲載します。

土曜日に掲載します